

編集後記

『日中語彙研究』第5号をお届けします。

ここ一年間、編集組織のメンバー交替がありました。それまでに培った経験と叡智を引き継ぎ質の高い学術雑誌を作るよう努力してまいりました。多くのご投稿と執筆を快くお引き受けいただいた諸先生方のお蔭で、第5号も充実した内容で完成の日を迎えることができました。

研究論文のうち、板垣友子氏の「官話教科書の日本語訳に関する考察—宮島大八の教本を中心に—」は、『官話急就篇』の日本語訳本と宮島自身による『急就篇』の日本語訳を比較し、近代中国語教育の考え方が当今の中国語教育に与えた影響を考察しました。呉夫迎氏の「中国語における改革开放後新出の日本来源語について」は、サンプリング法で《現代漢語詞典》第6版に収録された来源未明記の新出語を日本語由来であることの検証により日中語彙交流の一端を示しました。呉琳氏の「慣用句「鳥肌が立つ」の使用実態調査—近現代の用例を中心に—」は、コーパスからの用例収集を通して「鳥肌が立つ」の意味の経年変化を辿りました。侯仁鋒氏・浅野雅樹氏・丸山浩明氏の「コンピュータ適応型中国語テストの開発について—語彙問題アイテム開発を例にして—」はC-CATによる日本人中国語学習者の中国語能力テストにおける語彙の選定過程とデジタルアイテムの開発についての研究報告です。劉克華氏・張鳴氏の「日本語における男女用語に関する対照研究」は、日本語の男女語彙の特徴と社会的要因を分析しました。王安泉氏の特別寄稿「中国の財神・趙公明から日本の財神・大黒天まで—日中両国における財神文化の歴史的起源を探る—」は、日中両国の財神文化の歴史を探りながら、中国の文化が日本に与えた影響を論じたものです。

今号で新たに設けた「中国語教育の現場から」は第4号の「第一線から」を受け継いだ項目で、顧令儀氏の「“不管…都”と“不管…也”に関する一考察」は、教育現場で抱いた問題意識から、両者を無条件に置き換えることができないことを中国語母語話者への調査で明らかにし、教学への提言を試みました。「新語録」では創刊以来最新情報をレポートしてくださる趙蔚青氏のほか、劉柏林氏の新語（新用法）の「接地気」を、「動向」では、これまで同様、彭広陸氏による「中国における日中語彙対照研究の動向 2015」を掲載しています。

また、今号から目次を日中両言語併記としました。なお、上述の文中では、便宜上タイトルをすべて日本語にしてあることをお断りします。

最後になりましたが、創刊から変わらぬご尽力をくださる顧明耀先生に感謝申し上げます。

(編集委員会)

『日中語彙研究』第5号

2016年3月31日発行

編集・発行 愛知大学中日大辞典編纂所

名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777

Tel. 052-564-6122 Fax. 052-564-6222

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/>

組版 株式会社あるむ
